

東京都練馬区の武蔵学園でのフクロウの落鳥事例

およびバードセーバーの試験的設置

白井 亮久¹・浅井 周²・本多琉惟²

(¹ 生物科・² 生物部)

要 旨

2024 年 12 月に東京都練馬区の武蔵高等学校中学校の敷地内で発見された負傷したフクロウの死亡事例を経緯とともに報告する。落鳥した個体の形態観察をしたところフクロウハジラミの寄生が確認された。武蔵学園ではフクロウが初記録であること、近年の都内でのフクロウの生息や繁殖状況を踏まえると、今回見つかったフクロウは飛来個体と位置付けられる。負傷したフクロウが見つかった場所は林に隣接する建物のそばで、ガラス窓に衝突した可能性がある。武蔵学園構内ではバードストライク（バードコリジョン）が頻発しており、今後のそれらの防止策として高中敷地内に試験的にバードセーバーを設置した。

Keywords: 生き物地図, 衝突痕, バードコリジョン, バードストライク, ハジラミ

はじめに

フクロウ *Strix uralensis* はフクロウ目フクロウ科に属し、ヨーロッパからアジアにかけてのユーラシア大陸に広く分布する（波多野・金子, 2002）。日本に生息するフクロウ目の中では夜行性の大型種でネズミを好んで捕食する。大径木の樹洞のほかタカ目などの猛禽類やカラスの古巣に営巣することもある。最新の東京都レッドデータブックでは、本土部で絶滅危惧 IB 類（EN）、区内で絶滅危惧 IA 類（CR）に指定されている（東京都環境局, 2023）が、近年、都市部の緑地や社寺林で相次いで繁殖が確認されている（樋口ほか, 2024 ; 鈴木, 2024 など）。東京都練馬区に位置する武蔵学園には、創立当時から植栽された大きな樹木があり構外からツミやオオタカなどのタカ目の猛禽類が飛来することもあるが（白井, 2023a）、これまでフクロウ目が来たことはない。

本報告では、2024 年 12 月に武蔵学園で初確認されたフクロウ个体について、その後死亡した経緯、傷害の状況、形態的特徴、および外部寄生虫を記録する（図 1）。また、フクロウが発見された場所はバードコリジョン（バードストライク）が起きやすいと判断されたため、バードセーバーを設置した。



図 1. 武蔵学園構内で見つかった傷害のフクロウ (2024 年 12 月 13 日, 図書館棟入口)

A. 立ったままじっとしている(10 時 01 分, 撮影: 五十嵐裕司), B. 羽ばたこうとするも飛べない(10 時 28 分, 撮影: 小山和政), C. 体勢を保つことができない(10 時 28 分, 撮影: 池原 満), D. 羽根を広げ動けなくなった(13 時 33 分, 撮影: 山口和美)

1. フクロウ発見から死亡までの経緯

2024年12月13日、フクロウが東京都練馬区にある武蔵学園南側的高中図書館棟入り口付近において、地面に落ちて衰弱した状態で発見された（図版1）。第一著者は当日、中学1年の地学巡検に同行しており現場には不在であったが、第二および第三著者はへい死の現場を確認した。後日、当時の状況を把握するために、学園関係者十数名に聞き取り調査を実施し、内容を記録した（表1）。さらに、フクロウが発見された現場周辺でフィールドサイン（羽根、糞、衝突痕など）を調べ、負傷の状況と原因について推定を試みた。

以下に、聞き取り結果に基づく当日の時系列を示す（表1）。最初の目撃は8時頃で、図書館棟の清掃を終えた清掃員が発見した。清掃員は、当初「ぬいぐるみが落ちているのかと思った」と話しており、動かない個体の様子をみて驚いたとのことである。清掃を開始した6時半頃には周囲は暗く、当時すでにその場所にいたかは不明である。その後、8時から9時にかけて清掃員から高校中学の事務室や守衛室に連絡が入り、事務員が現場を確認したのち、9時45分頃に東京都の関係部署に通報した。都からはフクロウの状態、足環の有無および外傷の有無について尋ねられたが、足環は確認されず、明らかな外傷も見られなかったことから指示に従い、しばらく様子を見ることになった。10時15分頃には、事務室により注意喚起の立て看板が設置された（図2）。その後、話を聞いた大学の丸橋珠樹さんや教職員が現場を訪れた。10時半頃には、フクロウは羽根を広げるなどの反応を見せ、閉じていた眼も開くようになった（図1B、動画：<https://youtu.be/0EZwhVyvLLw>）。しかし、11時55分頃に撮影された写真では羽根を広げたまま動かず、13時半の時点でも同様の姿勢であった。15時過ぎに事務室から部会中の生物部に連絡が入り、第2・3著者ら生物部員らが現場に向かい、反応しないことから死亡を確認した。手袋とマスクを着用した上で個体を回収し、一時的に冷凍保管した。その後、都に「へい死鳥獣拾得届」を提出し、綿貫・高木（編）（2024）の手順に従い、外部形態の観察および計測、傷害の様子、外部寄生虫の有無などを調べた。



図2. 注意喚起のための立て看板
フクロウを○で囲った。

その後、話を聞いた大学の丸橋珠樹さんや教職員が現場を訪れた。10時半頃には、フクロウは羽根を広げるなどの反応を見せ、閉じていた眼も開くようになった（図1B、動画：<https://youtu.be/0EZwhVyvLLw>）。しかし、11時55分頃に撮影された写真では羽根を広げたまま動かず、13時半の時点でも同様の姿勢であった。15時過ぎに事務室から部会中の生物部に連絡が入り、第2・3著者ら生物部員らが現場に向かい、反応しないことから死亡を確認した。手袋とマスクを着用した上で個体を回収し、一時的に冷凍保管した。その後、都に「へい死鳥獣拾得届」を提出し、綿貫・高木（編）（2024）の手順に従い、外部形態の観察および計測、傷害の様子、外部寄生虫の有無などを調べた。

これらの記録および写真・動画から、フクロウのおおよその死亡時刻が推定できる。8時～10時頃は立ち上がって静止の状態（図1A 動画：<https://youtube.com/shorts/2cf6A1gAliE>），その後11時頃までは羽ばたく動きも見られた（図1C、動画：<https://youtu.be/slen5QYTPpQ>）。

11 時 55 分に撮られた写真では羽根を広げたまま動かず、13 時・15 時の時点でも同じ場所に倒れていたことから、12 時前後に死亡した可能性が高い。

表 1. 武蔵学園でみつかったフクロウの状況と周囲の対応（2024 年 12 月 13 日）

時刻	フクロウの状態	記録	周囲の対応
6:30			周囲は暗く確認できず
8:00	じっとしていて動かない	図版1	図書館棟入口の建物脇でフクロウが落ちていることを清掃員が発見(第一発見)
8:30 ～ 9:30	立ち上がるが、ほとんど動かない(触っても反応しない)。片側の羽根しか広げない		事務室や守衛室が現場を確認
9:45	(同上)	図1A	事務室から都に連絡。指示を受ける
10:15		図2	事務室により、注意喚起の立て看板設置
10:30	立ち上がり、両羽を広げるなど羽ばたこうとするが飛べない。片目が開く	図1BC	聞きつけた学内関係者が様子見
11:55	建物の壁の近くで少し羽根を広げたままうつぶせになり動かない		理科助手が確認
13:30	(同上)	図1D	国語科教員、大学図書館職員が確認
15:30	死亡を確認		事務室から生物部へ連絡。生物部が状況を確認し、死体を回収。生物科の冷凍庫で一次保管
翌日以降		図4 図版2.3.4	「へい死鳥獣拾得届」の提出。形態測定・観察 ガラス窓にバードストライクの痕跡を確認 高中の建物内にバードセーバーを試験的に設置

2. フクロウの形態的特徴と外部からみた傷害、付随生物

フクロウの全長（頭頂部からつま先までの長さ）は 47cm で、翼開長は 93 cm、翼長は 32cm、尾長は 22cm、体重は 728g（へい死個体採集時の計測では 717g）だった（表 2）。外部形態から雌雄の判別は出来なかった。頭部が大きく、羽角がないこと、アイリングがピンク色であることなどフクロウの特徴を有し（図版 2-A, B）、全長は一般に言われる 50–62cm に対して、やや小ぶりの計測値であったが、おおよそフクロウの範囲に収まった（樋口, 2007；赤・岩井, 2008；ハイモ, 2018）。

フクロウ類の特徴として知られている、パラボナアンテナのような集音効果のある平たい顔、風切り羽（初列風切の第 10 羽と第 9 羽、小翼羽）の前縁部にある鋸歯状突起（セレーション）も確認できた（図版 2-B, C, F）。セレーションは羽ばたく時に小さな空気の渦を作り消音効果があるという（永田, 2023；樋口・高野, 2024）。また、多くの鳥類では毛が生えない跗蹠（ふせき：脛より下の部分）にある毛や、足指(趾)が前後に 2 つある変形対趾足など、フクロウ類に特徴的な形態も確認できた（図版 2-F）。

その他の特徴としてフクロウの耳は左右でずれた位置にあることが有名である。それを確認するために、へい死個体を調べたところ、右側の外耳孔は皿状の顔面のすぐ横に位置しており、左側は横ではなく顔面の上、つまり目の上部に位置し、明らかに左右非対称だった（図版 2-B）。これは、赤・岩井（2008）の観察記録と同じ傾向だった。一方、川上（2019）の骨格標本図鑑によればほぼ左右対称とあり、骨格標本では左右差が分かり難いのか、個体差かもしれない。また左右の外耳孔の大きさにも違いがあり、右の長径 29mm に対して左は 24mm と明らかに右が大きき（表 1）、これも赤・岩井（2008）の観察と一致するものだった。フクロウの持つ外耳孔は驚くほど大きく、永田（2023）にあるように外耳孔から眼球の裏側の強膜骨をみることができた（図版 2-D）。

次に、傷害の様子を記録する。嘴部からの流血の痕、右翼の内側にも血痕が確認できた。右翼の血痕があった場所は、翼を広げた時に嘴に届く場所で、嘴の血が付いたものと思われる（図 3）。その他で目立った外傷はなかったものの、より詳しい精査のために、今後頭骨などの内部の傷害の状況の把握が必要である。

表 2. フクロウ個体の
計測値 (MB09-01)

計測箇所	計測値
全長	47cm
翼開長	93cm
翼長	32cm
体重	728g*
外耳孔の長径	
右	29mm
左	24mm

*発見時 717g(生物部計測)



図 3. フクロウの嘴の傷害と羽根についた血痕.

鳥類の体表には、外部寄生虫のハジラミ、ノミ、シラミバエ、ダニなどが付くことがある（鶴見，2023）。今回、落鳥したフクロウの羽毛や体表面、また、へい死体を収納したビニール袋の中を調べたところ、外部寄生虫 10 個体を採取した。どれも全長約 2mm で、厚

さ 0.5mm 程度の潰れた扁平な体をしており（図 4）、腹部の毛の量に差があるものの、同一種と思われた。比較的大きな頭に大きな下顎を持ち、小さい胸部に 3 対の脚、腹部には長い毛を有しており、フクロウハジラミ *Strigiphilus fukuro* の特徴を有していた（Uchida, 1948）。なお, *S. fukuro* は現在 *S. heterocerus* のシノニムとされている（Shimada and Yoshizawa, 2020）。本種は咀嚼目の昆虫で羽毛を食べ、生活史を鳥の体で過ごす（平嶋・森本, 2008）。アルコール標本として 3 個体を保管した（標本番号 MB09-02）。

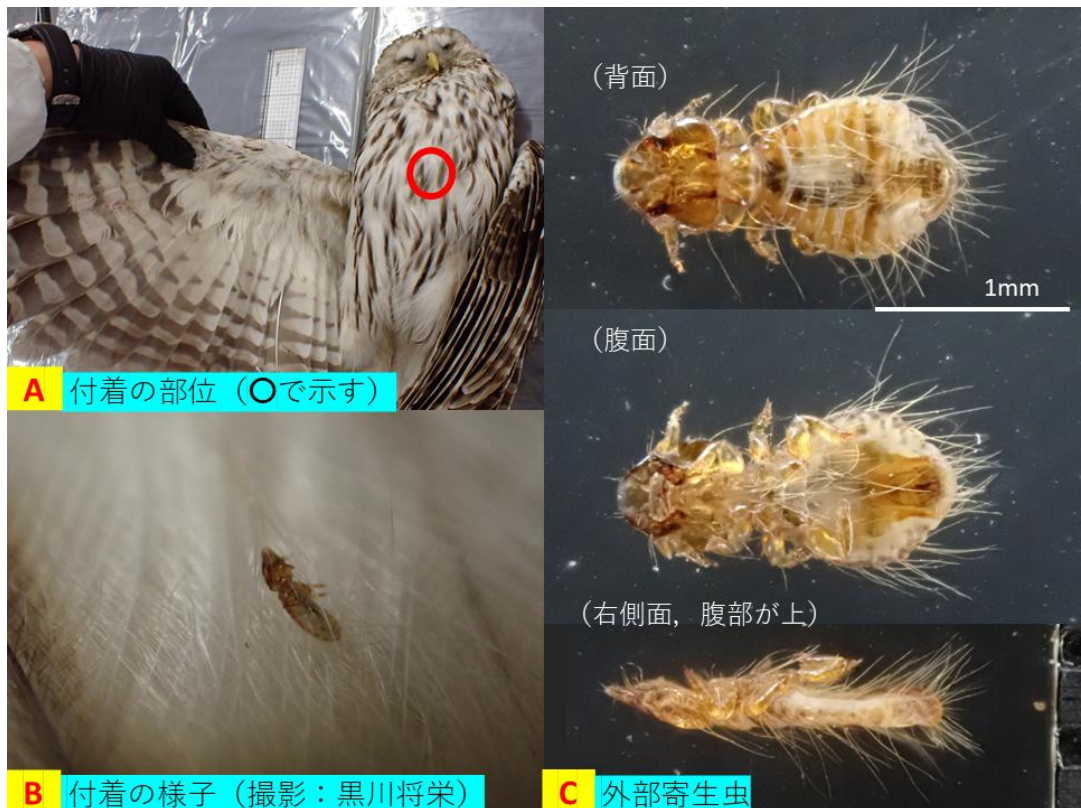


図 4. フクロウの体表に着いていたフクロウハジラミ（咀嚼目）。

A: 付着していた部位. B: 体毛での付着の様子. C: 個体の写真で背面・腹面・右側面を示す（スケールバーは 1mm）。標本番号 MB09-02 としてエタノール固定した。※B と C は異なる個体。

3. フィールドサインや落鳥の原因の推察

フクロウが発見され死亡が確認されるまでの少なくとも 7 時間はほぼ同じ場所に留まっていた。後日フィールドサインがないか確認すると、そこで小さな糞のようなものが確認された（図 5）。フクロウのものかは不明である。またペリット等も見つからなかった。

見つかった場所や羽ばたくが飛べないという状況から、その個体はガラス窓の衝突によ

るバードコリジョン（バードストライク）による可能性があり、周囲を確認した。すぐ近くの図書館棟 1 階入口のガラス扉には痕跡はなかったが、その 2 階の西棟との連絡通路（渡り廊下）のガラス窓には翼の形をした鳥類がぶつかったとみられる油脂痕が複数確認された（図版 3-A, C）。フクロウやハトの仲間には胸部に粉綿羽があり（永田, 2023）、ガラスにぶつかった際に羽根の痕が残りやすい。残念ながらフクロウとわかる形の油脂痕は見つかなかったが、このように見つかった時の場所や様子、ケガの傷害、また建物近くであることから、今回のフクロウの負傷はガラス窓への衝突による傷害の可能性が高いことと判断した。

その後の観察で、同じ場所において 2025 年 1 月 7 日にハトの明瞭で新しい衝突痕を見つけた（図版 3-A）。翼の両端、腹部の羽毛だけでなく、頭部と嘴、またハトに特有な嘴の根元の左右ある鼻瘤（鼻こぶ）の痕も見つかった。鼻こぶがあることから、ぶつかったハトはドバト *Columba livia* var *domestica* とみられる。その場所にハトの死体は見つからなかった。他にも、その一面のガラス窓には古い鳥の衝突痕が残り、残存林からグラウンドに抜けるこの場所でバードコリジョンが起きやすい場所であることが分かる（図版 1-B）。それを裏付けるように、渡り廊下の内、東側の窓ガラスには合計 7 つの油脂痕が見つかった（2025 年 3 月）。一方、反対側の西面の窓ガラスに油脂痕はひとつも見つからないため、林からグラウンドに抜ける際にぶつかることが多いという事が推測される。今後の鳥類の衝突防止のために、高中事務室・施設課への連絡の上（図版 4）、後述するように簡易のバードセーバーを設置した。

フクロウによるバードコリジョンの誘因事例として、カラスの追尾によるものがある。樋口・高野（2024）や水口・先崎（2023）にも、フクロウがカラスに追われている写真が掲載されている。2024 年 11 月に大分市でテレビ局のガラス扉に激突して負傷したフクロウの事例もある。これはカラスに追われたもので、その様子は動画でもみることができる（TOS オンライン, 2024online）。

武蔵学園で落鳥したフクロウが見つかった当日の朝 8 時過ぎに近くを通った守衛さんの話によると、フクロウのすぐ上空に 1 羽のカラスが良く鳴いていたとのことである。目撃者がいないため推察になるが、構内上空を飛んでいたフクロウが、定住しているカラスに追われ、教室南棟角の「やぎ小屋」付近から上グラウンドに抜けるように入り、ガラスに衝突したのかもしれない（図版 1-B）。「やぎ小屋」と林の間から落鳥現場をみると、グラ



図 5. 落鳥フクロウの
そばにあった鳥の糞

ドに抜ける道がみえる（図版 1-C）。1 階部は奥にグラウンドに入る網やサッカーゴールの網がみえ、ガラスのない 3 階部の開放部は大きなシラカシの枝が邪魔でみることができない。唯一の通り道として 2 階部が見え、そこを抜けようとしてガラス窓にあたり落鳥してしまったとも考えられる。ガラス窓への激突があったとして、発見から 4-6 時間ほどで死んでしまったことから、頭部や頸部へ損傷の可能性がある。

4. フクロウはどこから来たか

武蔵学園では普段フクロウをみることはない。そのため、今回見つかったフクロウが飛来個体であることは間違いなく、その個体がどこから来たのかは興味深い。残念ながら足環はついていなかったため特定することはできないが、近隣の分布・目撃情報から練馬区、および都内の情報をまとめた（図 6）。



図 6. 東京都内でフクロウが確認されている場所（2002 年-2025 年頃）。

背景に google map を使用した。

まずは練馬区内についてみると、北部の光が丘公園で 2004 年度までは記録されていないが（佐藤・伊東，2011），2005 年以降，単発的に確認されている。2024 年頃より，比較的頻繁にみられ，つがいもいることから繁殖も期待できるという（増永，2025；NPO 法人生態工房職員による私信）。石神井公園では，1987 年から 2018 年の 31 年にわたる調査で，

2002 年に一度だけ目撃情報がある（石神井公園野鳥と自然の会，2019）。なお半世紀以上前の練馬区教育委員会（1961）の報告では，練馬区ではフクロウ目はオオコノハズクとアオバズクの記録のみで，フクロウは記録されていない。練馬区に隣接する板橋区と杉並区でも記録がないが（板橋区，2002；杉並区環境部環境課，2025），中野区では 2010 年 10 月末に哲学堂で中野区における初記録として，目撃したフクロウとカラスとのやり取りが記録されている（日本野鳥の会東京，2010online；吉邨隆資，2011）。哲学堂は武蔵学園から南南東に 1.6km ほどのごく近い距離にある。

次に都内でみると，近年フクロウが良く観察され増加傾向にある（樋口，2024）。目黒区の自然教育園は通過個体として何度か報告があり，営巣したオオタカへの接近事例もある（川内，2021；樋口ほか，2024）。武蔵学園の南部に位置する世田谷区では，2004–2020 年に，年に 1 度より低い頻度で散発的に飛来しており，いずれもカラスに追われる姿が観察されている（世田谷トラストまちづくり，2020）。2022 年には千代田区の皇居や港区の赤坂御用地（国立科学博物館，2022online）のほか，三鷹市（鈴木，2024）でフクロウの繁殖が確認されている。

このように，近年都内でのフクロウの目撃や営巣，繁殖事例が増えつつあり（図 6），これらの個体が武蔵学園に飛来したものと思われる。

5. 武蔵学園構内のバードセーバーと，高中校舎での試験的設置

武蔵学園構内には，鳥が生息・休息できる多くの木々があり，水飲み・水浴び場となる川も流れている。一方で，毎年冬に飛来する渡りのヒヨドリや，たまに来る猛禽類などが建物にぶつかり死亡することも少なくない（白井，2024；生物部調べ）。緑や水を有する学園である以上，それらとの共生のための配慮をする必要がある。

衝突を防ぐ一つの方法として，ガラス窓に，鳥を模したシールを貼るバードセーバーを設置することが考えられる。実際，武蔵学園構内には大学 2 号館と大学図書館の窓にバードセーバーが設置されている（図 7）。大学図書館の開けた南側と，中庭に面した北側の 2-3 階のガラス窓には，複数のバードセーバーが貼られており，これらは 1985 年頃に設置されたものとされる（大学図書館職員による私信，浅井 2024MS）。大学図書館が設立された 1981 年からガラス窓に衝突する鳥が絶えず，設置に至ったそうである。設置後にかなり軽減したが，現在でもぶつかることがあるようだ。また，現在は改築に伴い取り壊されてしまった大学 2 号館の西側の 2 階部のガラス窓（中講堂の出入り口）にも，バードセーバーが設置されていた（図 7 の A）。こちらの設置の詳細については不明である。

高中校舎にはこれまでバードセーバーが設置されていなかったが，今回のフクロウの落鳥が確認されたことを受け，緊急対応としてその付近の 2 階渡り廊下林側のガラス窓など

に試験的にバードセーバーを設置した（図版3）。設置場所は、ハトの衝突痕や過去に落鳥が多く見られた地点を参考に選定した。高中生物科には、過去約10年間の学園内の落鳥記録が保管されており、最近（2025年2月）にはヒヨドリの衝突死も急増している。今後はバードセーバーの効果を検証するとともに、落鳥個体の種類や季節の変動、場所の傾向などを精査し、共生に向けた知見を蓄積していく予定である（浅井ほか、準備中）。



図7. 武蔵学園内におけるバードセーバーの位置

- A. 大学2号館（大学2号館の改築のため、2025年現在撤去）、
 B. 大学図書館（2025年現在も見ることができる）、C. 高中図書館渡り廊下（本報告で設置）

おわりに

武蔵学園は都内の住宅地に囲まれた緑地や水辺として、野鳥をはじめとした生物の避難所・休息所として機能しており、サギなどが飛来することもある（白井, 2023b）。一方、緑と建物が共立する学園構内では、カラスなど少なからず生物と人間との軋轢も生じることもある（白井, 2024）。バードストライクもその一つで、これまで飛来したカワセミなどの例（白井ほか, 2023）や、猛禽類やシギの仲間なども見つかった（生物科調べ）。

第1 著者が勤務した15年間でフクロウの飛来の確認は初めてである。また、普段鳥を好んで構内を観察している第2・第3 著者も初めてのことだった。構内の緑の規模や営巣するカラスの存在から、武蔵学園構内でのフクロウの繁殖は難しいかもしれないが、創立以来植栽されてきた樹木は大径木となり、そこに樹洞がみられることから、自ら巣を作らないフクロウ類の住みかとなる潜在的な環境が創出されているといえる。一方で、フクロウは猛禽類やカラスなどの古巣を使うともいわれており（東京都環境局，2023）、学園内での種間関係を理解しながら観察を続ける必要がある。

武蔵学園内での生物多様性を確保するために、まとまった樹木には存在価値はあり、図書館棟裏の創立前からある残存林をはじめとして構内の樹木を学園として大切にしていきたい。しかしながら、近年ブナ科の大径木へのナラ枯れの被害（白井・秋葉(岩渕)，2023）があり、枯死の恐れや落ち枝、倒木の危険も伴う。ヒトと自然が接する場として、管理や学内の見回りの強化などに力を入れるべきと考える。

練馬区西部の石神井公園には、ここ数年初夏にフクロウ類のアオバズクが飛来し、繁殖している（練馬区，2020online）。古く大きな樹が植栽されている武蔵学園でも、樹に止まるそれらのフクロウ類をみることがあるかもしれない。いつか、そうした光景が構内でみられたらと思う。

謝辞

落鳥したフクロウについて、毎日朝早くから学内の美化に従事する清掃の方々には、昼休みの貴重な時間に聞き取りに協力して頂いた。特に、武蔵エンタープライズの小林さん、碓井さん、佐藤さん、北川さんの4人にはお世話になった。

高中事務室の五十嵐裕司さんには、都への連絡、周囲に注意喚起するための立て看板、顧問不在時の生物部の部員への連絡と安全配慮など、適切な対応をして頂いた。また当時の状況や撮影した写真や動画の提供は、五十嵐さんのほか、事務室の下松良子さんと大谷麻子さん、生物助手の多田真美さん、守衛室の池原 満さん、真板拓巳さん、小山和政さん、高中国語科の江種俊光さん、武蔵大学図書館の山口和美さんに、また武蔵大学名誉教授の丸橋殊樹さんから情報も頂いた。外部寄生虫の付着の写真については、生物部の黒川将栄くんから提供して頂いた。これらの方々にお礼申し上げる。

引用文献

浅井 周. 2024MS. 武蔵学園での鳥類の窓ガラス衝突の発生状況とその対策の検討. 武蔵中学校 中学3年社会2卒業論文. 11p.

波多野鷹・金子弥生. 2002. フクロウとタヌキ 現代日本生物誌3. 岩波書店，東京. 170p.

- ハイモ・ミッコラ. 2018. 世界のフクロウ全種図鑑. エクスナレッジ, 東京. 527p.
- 樋口亜紀. 2007. 闇に舞うフクロウの狩りと繁殖. In: BIRDER 編集部 編. フクロウ : その生態と行動の神秘を解き明かす. 文一総合出版, 22-27.
- 樋口亜紀. 2024. 首都圏の孤立緑地にすみはじめたフクロウたち. BIRDER38(5) : 36-37.
- 樋口亜紀・遠藤拓洋・川内 博・井上裕由・西海 功. 2024. 自然教育園におけるフクロウ (*Strix uralensis*) の生息状況とオオタカ (*Accipiter gentilis*) 巢への訪問. 自然教育園報告 56 : 33-41.
- 樋口広芳・高野 丈. 2024. 身近な野鳥の観察図鑑 増補改訂版. ナツメ社, 東京. 391p.
- 平嶋義宏・森本桂 (監修). 2008. 新訂原色昆虫図鑑第三巻. 北隆館. 854pp. 東京.
- 板橋区. 2002. 板橋区野鳥の実態調査 (IV) 報告書. 日本野鳥の会. 38p.
- 川上和人. 2019. 鳥の骨格標本図鑑. 文一総合出版, 東京. 168p.
- 川内 博. 2021. 自然教育園におけるフクロウ・リュウキュウサンショウクイの初記録について. 自然教育園報告 53 : 65-66.
- 国立科学博物館. 2022online. 皇居と赤坂御用地でオオタカとフクロウが同時期に繁殖したことを確認 ; ハシブトガラスの個体数減少が要因か? 国立科学博物館プレスリリース 2022 年 12 月 21 日.
- <https://www.kahaku.go.jp/procedure/press/pdf/1014267.pdf> (最終閲覧日 : 2025/6/23)
- 永田 瑠. 2023. ときめくフクロウ絵図鑑. SB クリエイティブ, 東京. 191p.
- 増永望美. 2025. 都立光が丘公園 (練馬区) フクロウ繁殖も期待できる場所に成長. NPO Eco-Works Newsletter (認定 NPO 法人生態工房会報) 75 : 6. 東京.
- 水口博也・先崎理之(編著). 2023. 世界で一番美しいフクロウ図鑑. 誠文堂新光社, 東京. 159p
- 日本野鳥の会東京. 2010online. 中野区初記録・哲学堂公園でフクロウが。しかし・・・(2010 年 11 月 19 日).
- http://tokyo-birdstudy.blogspot.com/2010/11/blog-post_19.html (最終閲覧日 : 2024/12/20)
- 練馬区, 2020online. 広聴広報課です。『アオバズク』(石神井公園) の写真をお届け～～！モフモフで、おめめがクリクリしていて可愛いですね！現在は、暖かい南に旅立っていたようです。写真撮影日 : 10 月 15 日. 8:35 AM · Nov 19, 2020 Tweet.
- https://x.com/nerima_tokyo/status/1329206718492917760 (最終閲覧日 : 2025/6/23)
- 練馬区教育委員会. 1961. 練馬区内の野鳥について. 練馬郷土誌共同研究 1. 30p.
- 佐藤方博・伊東秀晃. 2011. 光が丘公園バードサンクチュアリにおける鳥類の観察状況-2004 ~2005 年度-. 工房のたまご(生態工房調査研究報告書) 5 : 35-68.
- 赤 勘兵衛・岩井修一. 2008. 鳥の形態図鑑. 偕成社, 東京. 179pp.

- 世田谷トラストまちづくり. 2022. 世田谷の鳥 2020—世田谷区鳥類目録—. 世田谷トラストまちづくり, 東京. 297p.
- 石神井公園野鳥と自然の会. 2019. 石神井の四季 30 年 資料編. 石神井公園野鳥と自然の会, 東京. 128p.
- Shimada, M. and Yoshizawa, K. 2020. A revision of *Strigiphilus* (Insecta: Phthiraptera: Philopteridae) from Japan. *Zootaxa* 4779(4): 501–521.
- 白井亮久. 2023a. 武蔵学園猛禽類マップ. 78–79. *In*: 亀岡岳志 (編著). 武蔵高等学校中学校地図帳プロジェクト ver.0 ～武蔵「らしさ」を複数の主題図から描く試み～. 武蔵高等学校中学校紀要 7 : 55–82.
- 白井亮久. 2023b. 濯川に落ちていたペレットの痕跡と武蔵学園構内で観察されたアオサギ幼鳥とサギ類. 武蔵高等学校中学校紀要 7 : 139–150.
- 白井亮久. 2024. 武蔵学園のカラスはどんな暮らしをしているか～2023 年前後の営巣と巣材および捕食・貯食行動の記録～. 武蔵高等学校中学校紀要 8 : 77–128.
- 白井亮久・秋葉(岩渕)祐子. 2023. 武蔵学園構内におけるナラ枯れ報告(2022 年度)～学園創立以前から存在する残存林で見つかったコナラの半枯れ～. 武蔵高等学校中学校紀要 7 : 3–30.
- 白井亮久・池原 満・村松茂樹. 2023. 武蔵学園で一時的に保護されたカワセミの幼鳥, および濯川でのカワセミの採餌行動の記録. 武蔵高等学校中学校紀要 7 : 151–160.
- 杉並区環境部環境課. 2025. 杉並区自然環境調査報告書 (第 8 次) (令和 7 年 3 月). 杉並区環境部環境課. 238p.
- <https://www.city.suginami.tokyo.jp/documents/5895/08shizenhoukokusyo.pdf>
- 鈴木遼太郎. 2024. 武蔵野市・三鷹市における猛禽類の生息状況. 都市鳥ニュース 37:2-6.
- 東京都環境局. 2023. 東京都レッドデータブック 2023-東京都の保護上重要な野生生物種 (本土部) 解説版-. 東京都. 879pp.
- TOS オンライン. 2024online. 「テレビ局社屋にフクロウ衝突」カラス襲撃からの警備員救出劇 防犯カメラに一部始終 大分 (2024 年 11 月 07 日)
- <https://tosonline.jp/news/20241107/00000010.html> (最終閲覧 2025/06/23)
- 鶴見みや古. 2023. 生き物の中に生き物。鳥が「地球」になる虫たち. *In*: 山階鳥類研究所. 山階鳥類研究所のおもしろくてためになる鳥の教科書. 山と溪谷社, 東京. 336pp.
- Uchida, S. 1948. Studies on the biting-lice (Mallophaga) of Japan and adjacent territories (suborder Ischnocera Pt. I). *The Japanese Medical Journal* 1 (4) : 303–326.
- 綿貫 豊・高木昌興 (編). 2024. 野外鳥類調査ガイド. 朝倉書店, 東京. 187p.
- 吉邨隆資. 2011. 中野区・哲学堂公園. ユリカモメ 663: 18.

図版 1. 学園の地図と、負傷したフクロウが見つかった場所



- A. 武蔵学園（東京都練馬区）の航空写真（google map を背景に使用）
- B. 推察されるフクロウの落鳥の状況（高中図書館棟入口付近）．（★はフクロウが見つかった場所．赤矢印→は推定されるフクロウの進路，緑色で塗った部分は林を示す）
- C. 林の入り口(👁👁)から建物と渡り廊下を見た様子

図版 2. フクロウの形態的特徴



A. 全身（スケール：50cm 物差し）



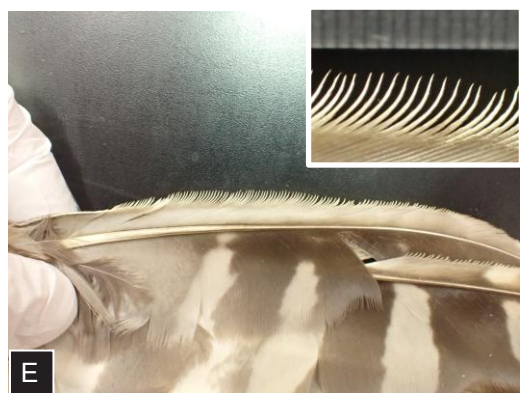
B. パラボラアンテナのような顔面（赤線は左右の外耳孔のおおよその位置を示す）



C. 平たい顔（右横から）



D. 右の外耳孔の位置（強膜骨がみえる）



E. 初列風切のキュレーション（刺状突起）

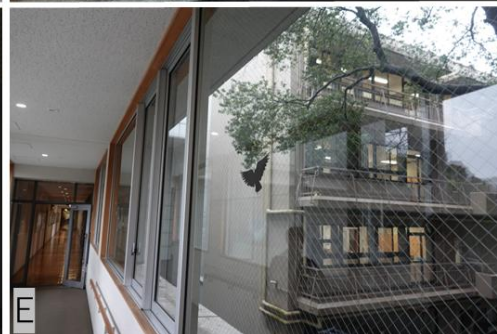
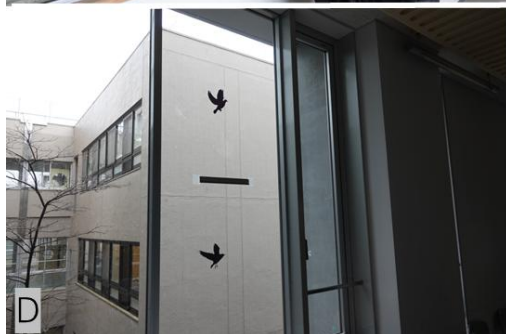


F. 足の様子（跗蹠と趾の毛，鋭い爪）

図版 3. バードセーバーの設置



A. フクロウが見つかった場所の近くの渡り廊下の衝突痕（2025/1/7）. 翼間の大きさは53cm, 嘴の付け根にこぶがあることからドバトとわかる。



B～E. 高中建物でのバードセーバー設置の様子（C の撮影：浅井）

図版 4. 高中敷地内でのバードセーバーの設置に関する資料

【ガラス窓にぶつかる野鳥】

- 学園内では鳥の死体が見つかることがある。
- 多くが建物のガラス窓にぶつかった衝突死（学園内でも年間10件以上はある、生物科調べ）
- 特に最近「西棟-図書館棟の2階渡り廊下」の窓ガラスが多い（フクロウ、その後もハトなど、図1-2）



図1. ガラス窓にぶつかったと思われるフクロウ
(2024/12/13 図書館棟入口付近)



図2. ガラス窓にぶつかったハト個（ドビト）
(2025/01/07図書館棟2階渡り廊下)

→ 学園で緑を有する上で野生生物との共存を考えることが必要

設置場所

(①)西棟-図書館棟の2階渡り廊下など
他、②理科棟エントランス1階（廊下、ヒヨドリが長く居る）



② 2025/02/19 要中待合



①

まずは試験的に、上のようなシールを貼って様子をみたい
(景観上の問題はあるが...)



西棟-図書館棟の渡り廊下 2階の窓ガラスへのバードセーバーの 設置の提案

2025/02/24 生物科・生物部

【高中校舎内でバードセーバーを設置したい】

- 衝突や衝突死を防ぐために、**バードセーバーが有効**
(ガラス窓に鳥などのシールを貼り、ガラスがあることを分かりやすくする)。

<例> 大学図書館の窓 (図3-4)

- 順み取りによれば、1981年大学図書館が建った後、窓ガラスへの鳥の衝突死が目立ったためバードセーバー設置(1987年頃)。その後は減ったとのこと。




図3. 大学図書館外観
図4. 大学図書館の窓ガラスのバードセーバー



写真. 2023 年度武蔵高等学校中学校の第 101 回記念祭のシンボルはフクロウだった。左はフクロウの焼き印，右はパンフレット。デザインパート長の伊藤くん（98 期）は元生物部である。

Akihisa SHIRAI, Shu ASAI and Rui HONDA (2025) A dead owl at the Musashi Academy Campus in Tokyo, Nerima ward in winter of 2024, and the pilot installation of bird savers. The Musashi Bulletin 9: 73–90.

Abstract

This report summarizes the timeline from the discovery to the death of an injured owl found on the grounds of Musashi High School and Junior High School in Nerima Ward, Tokyo, in December 2024. Upon examining the fallen bird, it was confirmed that it was infested with owl lice. This is the first recorded instance of an owl at Musashi Academy Campus, and considering the recent presence and breeding status of owls within Tokyo, the owl found in this case is likely an immigrant individual. The injured owl was found near a building adjacent to a forest, where it may have hit a glass window. Bird collisions (bird strikes) have been occurring frequently within the Musashi Academy Campus, and as a preventive measure, bird savers have been installed on a trial basis within the high school grounds.